

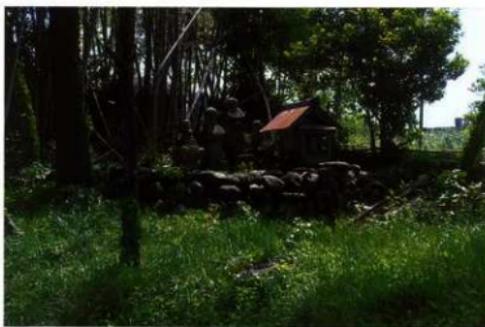
隱岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書

東 船 遺 跡 Ⅱ

平成14年3月

島根県隠岐支庁空港建設局
隠岐島後教育委員会

東 船 遺 跡 Ⅱ



船親王の墓（調査前）



第31調査区より今津港を見る

平成14年3月

島根県隠岐支庁空港建設局
隠岐島後教育委員会

例 言

1. 本書は、隠岐島後教育委員会が島根県隠岐支庁空港建設局の委託を受けて、平成13年度に実施した隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

調査の対象の東船遺跡は、平成10～12年度に島根県教育委員会がその大半の調査を行い、平成13年度はその残存部分について隠岐島後教育委員会が発掘調査を実施したもので、報告書もそれぞれに作成しました。

2. 調査組織

| | | |
|-------|----------------------------|--------------------------------|
| 調査主体 | 木瀬一郎 | 隠岐島後教育委員会教育長 |
| 事務局 | 斉藤弘徳 | 隠岐島後教育委員会社会教育課長 |
| | 藤原時造 | 隠岐島後教育委員会社会教育課主任 |
| 調査指導 | 島根県教育庁文化財課及び島根県埋蔵文化財調査センター | |
| 調査員 | 横田 登 | 隠岐島後教育委員会社会教育課文化振興係長 |
| | 野津研吾 | 隠岐島後教育委員会社会教育課臨時職員 |
| 調査補助員 | 田中芳文 | 隠岐島後教育委員会社会教育課臨時職員（平成13年9月まで） |
| | 西尾泰広 | 隠岐島後教育委員会社会教育課臨時職員（平成13年10月から） |

3. 現場における発掘作業及び遺物整理作業に参加、その他調査の実施に御協力頂いた下記の方々の名を記し、感謝の意を表します。

（敬称略）

| | | | | | | |
|------|------|------|------|-------|-------|-------|
| 門脇武雄 | 岩田良夫 | 滝下好一 | 松木由和 | 田中美穂子 | 占山長太郎 | 根本八重子 |
| H野喜勝 | 新見淑子 | 井川京子 | 高平鈴江 | 池田長之進 | 藤野喜多子 | 佐々木安江 |
| 占林和子 | 金岡道子 | 清水和雄 | 藤野庄一 | 高梨美穂子 | 佐々木菊雄 | 佐々木貞子 |
| 荒木忠義 | 村上広美 | 但馬 保 | 服部 勲 | 齊藤正敏 | 野津哲志 | 野津美幸 |

4. 本書の編集、執筆は、調査指導の先生方の指導、助言を得ながら、横田、野津、西尾が行いました。

5. 本書で使用した遺構記号は次のとおりです。

S I = 竪穴住居跡 S A = 欄列 S B = 掘立柱建物跡 S P = ビット S D = 溝、溝状遺構
S K = 土塚

6. 挿図中の矢印は真北を指します。なお、西郷における磁気偏角度は、 $N-7^{\circ}00'-E$ です。

7. 本書中の高さはすべて海拔高で表示してあります。

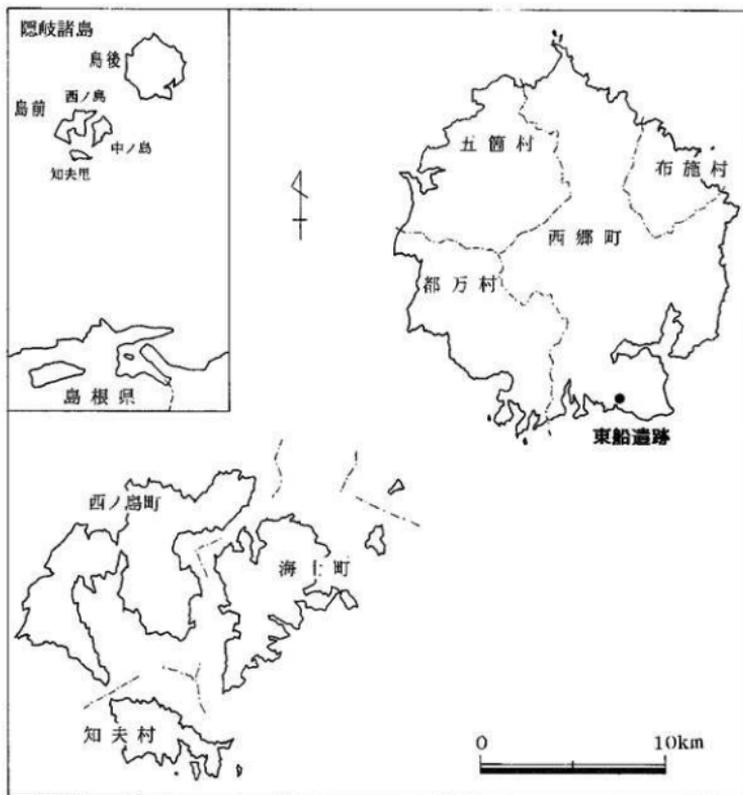
目 次

| | | |
|---|-------|----|
| 1 | 調査の経過 | 1 |
| 2 | 位置と環境 | 2 |
| 3 | 調査の概要 | 4 |
| 4 | 遺構と遺物 | 5 |
| 5 | おわりに | 14 |

1 調査の経過

隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財の調査については、平成7・8年度に島根県教育委員会、隠岐島後教育委員会により、周辺事業地を含め分布調査を実施しました。空港整備は、就航飛行機のジェット化を図るもので、滑走路の移転延長を主要な事業とするものです。家屋の移転等も多くあり、周辺事業地も含めると調査の対象地は膨大な面積でした。

分布調査の結果、かなりの範囲で土器片・黒曜石片の散布を見ることができ、8年度引続いて試掘調査を実施しました。これらの調査結果を基に、周辺事業地に所在する遺跡については地元の隠岐島後教育委員会が、空港整備（滑走路等空港本体部分及び客上採取予定地）に所在する遺跡については島根県教育委員会が実施することになりました。当東船遺跡は、島根県教育委員会が担当することとし、基本的に平成10～12年度の3ケ年で完了を目指してスタートしました。平成12年度の現地調査が終了した時点で、一部残ることになり平成13年度は隠岐島後教育委員会が、調査体制の規模をやや縮小して発掘調査を実施しました。



第1図 東船遺跡位置図

2 位置と環境

東船遺跡は、隠岐諸島の中の島後と呼ばれる島にあり、島根県隠岐郡西郷町大字今津に所在します。

隠岐諸島は、島根半島の北方沖合50~80kmに散在する4つの住民島と、大小180余の無人島からなっています。4つの住民島は大別して島前、島後と呼ばれ、南西部に位置する島前は西ノ島、知大里島、中ノ島の3島の総称です。島後というのは島後一島の呼称で西郷町、布施村、五箇村、都万村の1町3村で構成されています。島後は、群島中最大の面積(243km²)をもち、ほぼ円形に近い形をしています。島の南東部、北西部にそれぞれ西郷湾、重瀬湾が切り込みをつくっており、天然の良港となっています。

島の地勢をみると、最高峰大満寺山(608m)を中心とする山地は起伏がはげしく、それらが海岸まで続き断崖絶壁の海岸線を作っています。その中で、北西部の五箇村、北部の西郷町中村、南部の西郷町平、南西部の都万村にはまとまった平地があります。中でも西郷湾に流れ込む隠岐最長の八尾川の形成した八尾平野(西郷町平)は、隠岐最大の穀倉地帯といえます。島後の遺跡はこれら平野を取り巻くように集中しており中でも、西郷湾周辺は密集地といえます。

東船遺跡の所在する今津地区は、この西郷湾の南側の谷筋を通ったところに位置し、外海に面しています。東船遺跡は、海岸すぐ近くの標高約10~30mの緩やかな斜面上に広がっています。この東船遺跡は、島後では唯一の旧石器時代の遺物(黒曜石の細石刀核)が出土している遺跡で、さらに縄文時代の土器も見つかっています。

周辺の遺跡についてみると、縄文時代の遺跡は、ほとんどが西郷湾内沿岸部に所在しています。波の穏やかな内海での生活を基盤としていたものと思われます。前期を中心とする遺跡として宮尾遺跡(西郷町東郷)が、西郷湾の東湾ともいべき奥の小半島部に位置しています。時代が下るにつれて西方への移動が見られ、前期末から後期にかけての下西海岸遺跡(西郷町西)、後期を中心とするくんだり遺跡(西郷町西)などがあります。宮尾遺跡では条痕文土器や爪形文土器が見つっていますが、この条痕文土器は本土山陰側の佐太講武式に比定されるように、他の遺跡の縄文土器も、器形・文様等本土側と良く似たぶみが見られます。

弥生時代の遺跡としては、前期~中期の土器が月無遺跡(西郷町八田)で八尾川改修工事に見つかっています。そこから下流の小高い丘陵上の大城遺跡では、後期の四隅突出型埴土器が繁かれています。

古墳時代に人ると、前期の古墳はまだ見つかっていませんが、中期から後期にかけての古墳が八尾平野の西側と南側の丘陵地帯に集中しています。早い時期の古墳としては斎京谷古墳群(西郷町西)があります。5世紀代の円墳で径約25m、鉄直刀・鉄鍬等が出土しています。6世紀に入ると、小円墳が多数築かれるようになり、また前方後円墳も造られるようになってきます。島後最大の前方後円墳としては、八尾平野の西側に平神社古墳(西郷町平)があります。全長47m、後円部径約28m、高さ5mの墳丘をもち、くびれ部には横穴式石室が開口しています。7世紀代には横穴式古墳も多数造られるようになります。

奈良朝以降についても、八尾平野に条里制も確認されており、八尾平野の北側丘陵には国分寺・国分尼寺跡、南側の台地には国府が所在し政治の中心地といえます。中近世については、あまり研究が進んでおらず、今後の課題といえます。



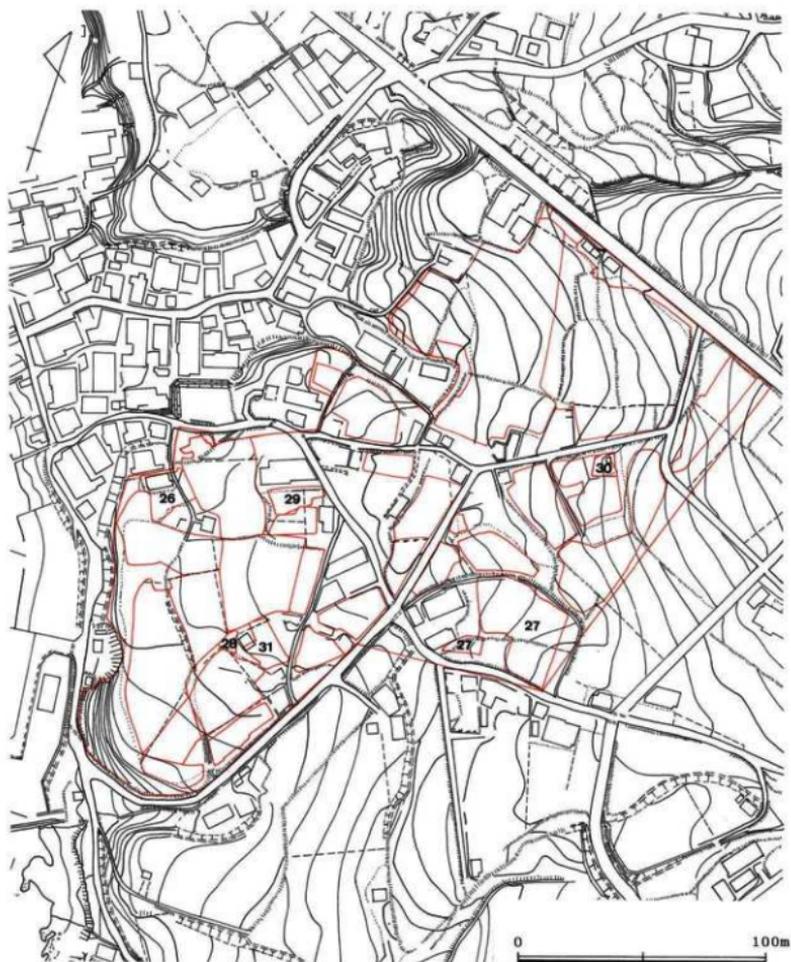
第2図 東船遺跡周辺の遺跡分布図

1. 船ヶ谷古墳 2. 向田古墳群 3. 扇紋園分寺跡 4. 野中西遺跡 5. 扇紋園分尼寺跡 6. 野中東遺跡 7. 尼寺原遺跡 8. 大光寺跡
9. 富田城跡 10. 水産高校西側溝穴 11. 小田古墳 12. 船田小学校裏古墳 13. 木先古墳 14. 平神社古墳 15. 平西古墳 16. 平東古墳群
17. 子安神社古墳 18. 中山古墳跡 19. 中山遺跡 20. 八尾川流域奈良新遺跡 21. 月無遺跡 22. 名田古墳群 23. 神米古墳群
24. 小田西光寺古墳 25. 神米遺跡 26. 京尾遺跡 27. 富尾古墳群 28. 津井古墳群 29. 津井海岸遺跡 30. ヒメサン古墳群
31. 下野御崎神社古墳群 32. 梅古墳 33. 梅岡寺跡 34. 玉若御命神社古墳群 35. 神政古墳群 36. 玉若御命神社境内古墳群
37. 櫻枝氏宅裏山古墳 38. 宮ノ前古墳 39. ハサコ古墳群 40. 宮家谷南古墳群 41. 宮家谷古墳群 42. 田井古墳 43. 熊木原古墳群
44. 熊木原遺跡 45. 甲ノ原遺跡 46. 大將軍遺跡 47. 甲ノ原古墳群 48. 白塚古墳群 49. 下西海岸遺跡 50. 国府尾城跡 51. 栗木遺跡
52. 西郷小学校古墳群 53. 大川神社古墳 54. 堂具トンネル遺跡 55. ヘギ古墳 56. ヘギ遺跡 57. 清久寺遺跡 58. 平崎溝穴
59. 西郷公園古墳 60. 磯中学校脇古墳 61. 大庄古墳群 62. くだりま遺跡 63. 高井古墳 64. 飯の山横穴群 65. 奥白遺跡 66. 森遺跡
67. 國司塚古墳 68. 御崎谷1遺跡 69. 大塚遺跡 70. 御崎谷2遺跡 71. 大塚遺跡

3 調査の概要

前年までの鳥根県教育委員会の調査を引き継ぐかたちとなり、調査区の呼称についてもこれに倣ったものです。飛び地状態の調査箇所を、空港整備関連事業の緊急度、立ち入りの可能等を考慮しながら、順次発掘調査を実施しました。

※ 赤枠は全体の調査区、数字は本年度実施の調査区No、数字のない区は調査済み



第3図 調査区配置図

4 遺構と遺物

I 遺構

[第26調査区]

12年度の第18調査区に隣接した調査区です。18区では、中世の堀立柱建物跡と、数多くのピットが検出されてきました。このピット群は、この調査区内に集中しており、本年度の調査においてはこの端の部分と思われるピットが僅かに検出されましたが、関連性は確認できませんでした。

これ以外には、土壇8、溝状遺構2が検出されました。

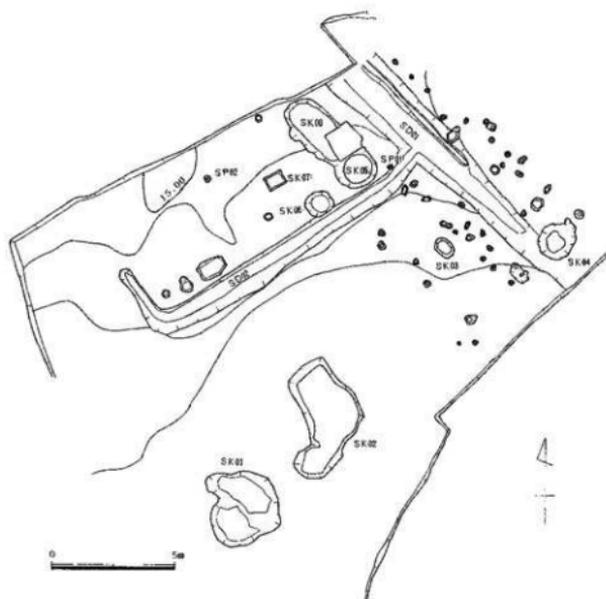
SK01・02・03・04・05・06・07・08

SK01・02は、かなり深い土壇ですが伴出遺物がなく、年代・性格共に不明です。木の根の攪乱とも思えますが、調査区東側に隣接して近代の土葬の墓がありますので、その関連性も考えられます。

SK03は、規模の小さい土壇で残存深さも浅く、数cmで底部が検出されました。埋土は、粘性の強い灰褐色の土ですが、遺物はありませんでした。

SK04・05・06は、形態・規模が類似しており、また伴出遺物も近世～近代の陶磁器ということで、ほぼ同時期に作られたものと思われませんが、その性格については良く分かりません。

SK07・08については、この部分に民家が建てられていたとのことで、聞き取りの結果、SK07はコタツの跡、SK08は便所の跡ということが分かりました。



SP01・02

どちらも平面径は小さいのですが、深さはかなりあり、底部に蓋付きの陶器が納められていました。丁寧に納められたらしく、完形で出土しました。

ここではピットとしましたが、出土状況を見ると地鎮等の意味を持つ埋納壇と見ることもできると思われます。

第4図 第26調査区実測図

SD01

南東から北西の方向に向けて作られています。地形そのものも、北西方向に緩やかに傾斜しており、溝の深さも浅いところは20cm位ですが、北西に向かうほど深くなっています。

溝底部西寄りには、人頭大の石が敷き詰められており、東側にはかなりの大きな石が整然と並べられています。地元の方の話では、調査区の東側にある墓地に行くための小道として使われていたとのことで、そのための敷石、石組と思われるます。

出土した遺物は近世～近代のものがほとんどで、この遺構は近世に作られ、使用されていたものと思われます。

〔第27調査区〕

この部分については、10年度当初においては調査対象地に入っていなかった箇所です。前年までの調査で、直ぐ北側に隣接する箇所において遺構・遺物が検出されており、また、地形的にも東から西に流れる谷状になっており、遺物が流れ込んでいる可能性が高いと判断されました。このため、試掘調査を実施することにし、谷を横断するように幅5mのトレンチを3本設定し調査を実施しました。その結果、大量の土器の破片と黒曜石片が出土し、全面調査を実施することになりました。

遺構は、横列と土塚のみでしたが、谷の部分からは、石鏃・石斧、土鏃、土師器・須恵器・陶磁器片等が多く出土しました。

SA01

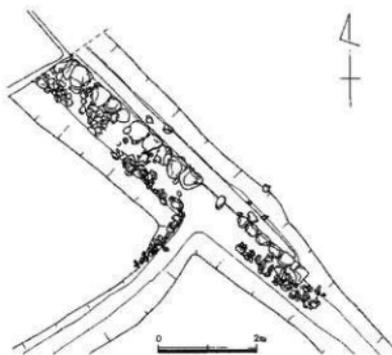
ほぼ東西方向で、4間分が検出されました。ピットの径は10～15cmで残存深さも浅いものでした。埋土も軟質なもので近代のものとも思われますが、伴出遺物もなく不明です。

SA02

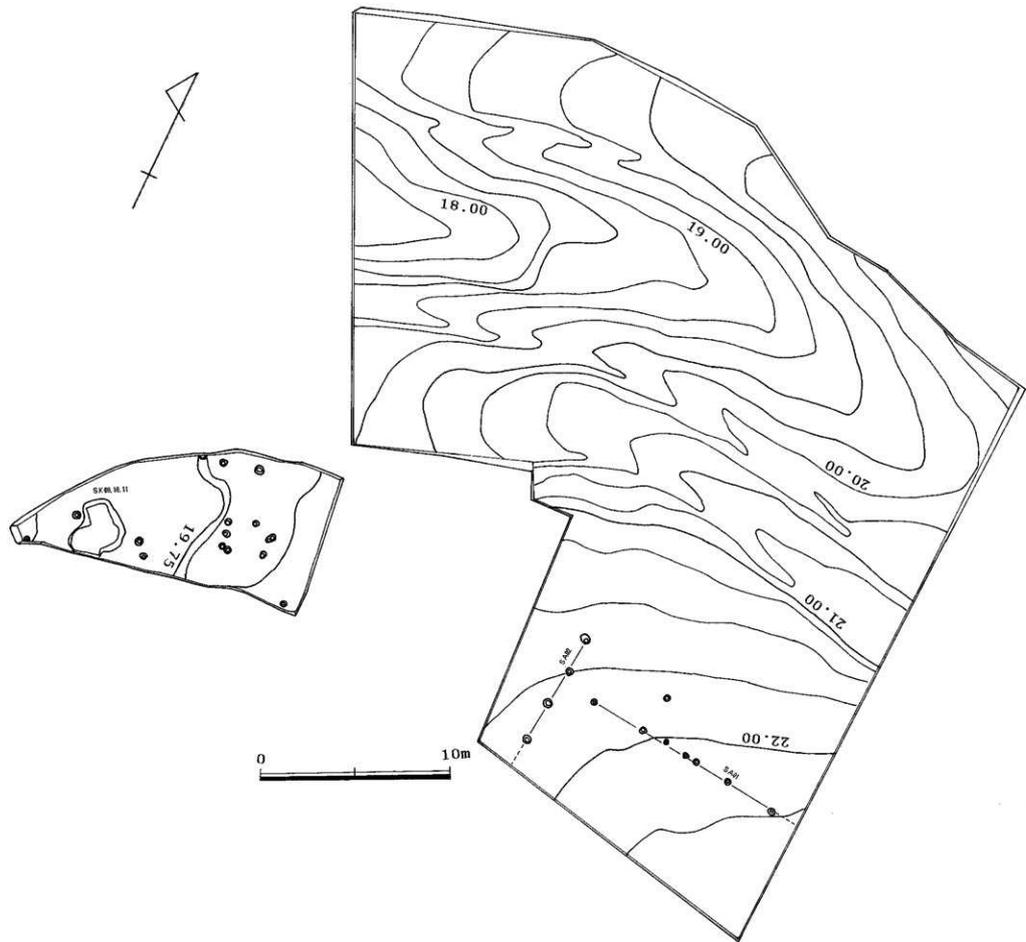
SA01に直交するように、南北方向で3間分検出されました。南側に延びる可能性もあります。ピットの残存状態は良くありませんが、間隔も揃っており、径もSA01より大きく埋土もしまっており時代的に古いと思われるますが、伴出遺物がなく年代・性格等は不明です。

SK09・10・11

3基の土塚が重なって検出されました。切り合いからみて、最初に北側の正方形の土塚、次に調査区隣にあるもの、最後に東側の土塚という順序で作られたと判断できます。性格・年代等は不明ですが、最後に作られた土塚の形態・立地位置等を考慮すると、当地に類例の多い畑耕作のための肥溜めの可能性が高いと思われるますが、確認はできませんでした。



第5図 SD01内の敷石、石組の状況



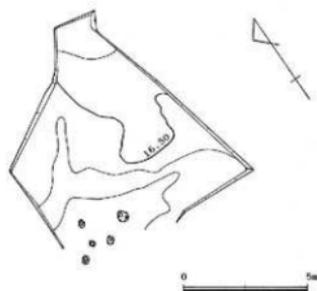
第 6 图 第 27 调查区实测图

【第28調査区】

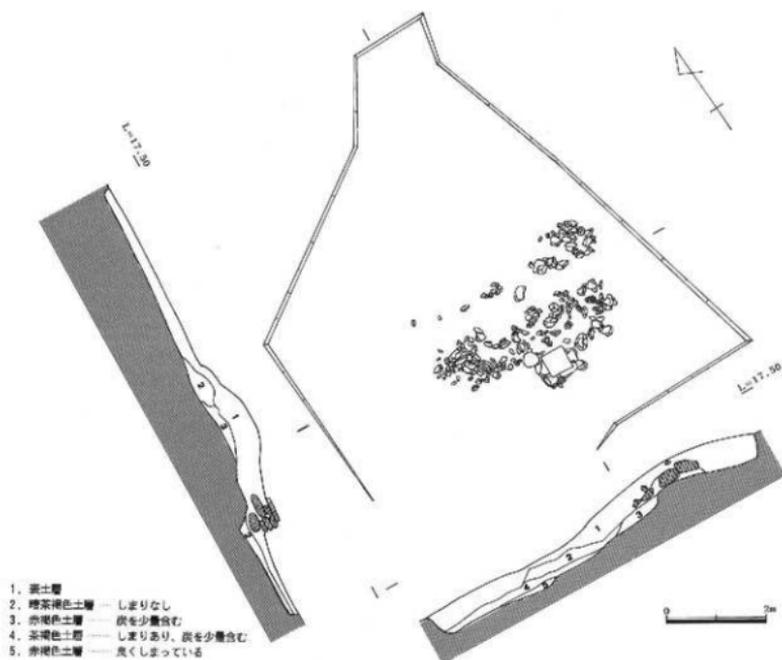
この調査区には、地元の人から「地主さん」と呼ばれ、代々祀られている小祠があります。小祠は、畑と畑の境の、少し段差のある場所に位置し土を盛り上げ、礫が集められており径約4m、高さ約50cmの円形をしています。

小円墳の可能性もあり、調査を実施しましたが円墳とは確認できませんでした。

一段下がった平坦面で数個のピットが検出されました。



第7図 第28調査区実測図



1. 黄土層
2. 暗茶褐色土層 ———— しまりなし
3. 赤褐色土層 ———— 炭を少量含む
4. 茶褐色土層 ———— しまりあり、炭を少量含む
5. 赤褐色土層 ———— 炭くしまっている

第8図 第28調査区石の散布状況

〔第29調査区〕

宅地の前庭として使われていた場所です。庭の西の端からは一段下がって畑になっているところですが。

かなり削平を受けており、表土そのものは薄く、数cmで遺構面になります。

棚列が2つ検出されました。遺物はこの調査区の中央から南では土師器、土師質土器の小片が数点出土しました。

SA03

約1mの間隔で4間分検出されました。前述のように、かなり削平を受けており遺存状態は良くありませんでした。伴出遺物として、陶磁器片が出土しましたが、小片のため年代を特定するまでには至りませんでした。

SA04

調査区のほぼ中央で、南北方向に3間分検出されました。性格年代共に不明です。

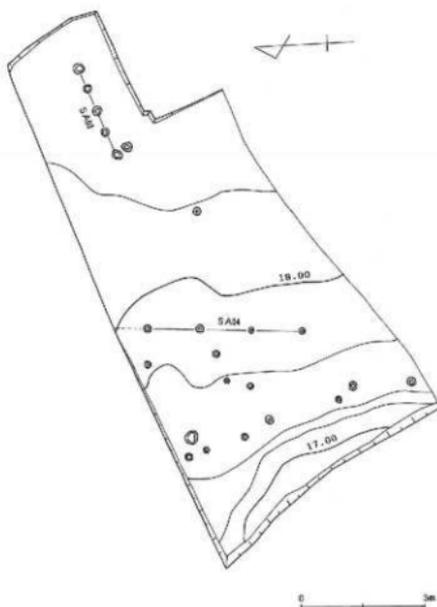
〔第30調査区〕

「親王塚」と呼ばれる墓がある場所です。この墓は、天平宝字8年の藤原仲麻呂の乱が原因で隠岐の島に流された船親王を祀ってあるといわれています。

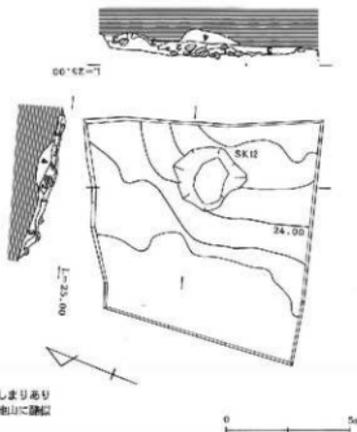
丘陵上に、自然地形を利用してながら人頭大より少し大きめの石を積み重ねて、長方形にの区域を作り、中央に小祠を置き、その後ろに五輪塔や宝篋印塔が、無秩序に積まれています。

調査はベルトを十字に残し、土層を確認しながら実施しました。

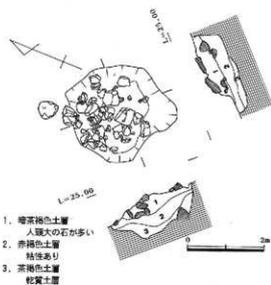
土塼が1基検出されました。



第9図 第29調査区実測図



第10図 第30調査区実測図



S K12

土層は、様々な大きさの石で覆われた状態で検出されました。石は上場だけでなく、30~40cmの深さまでは、疎らに入っていましたが、石質からみると、埋め込んだものでなく、重さで沈み込んだものと思われます。

土層の大きさは、上場径約2.5m、深さ約1mで円形に掘り込まれています。遺物は出土されませんでした。

第11図 S K12実測図

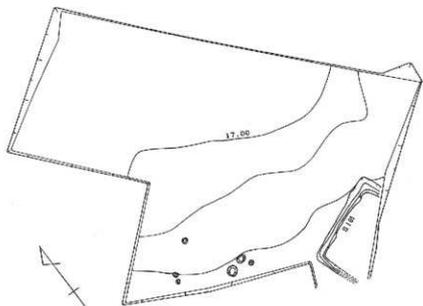
[第31調査区]

S I 01

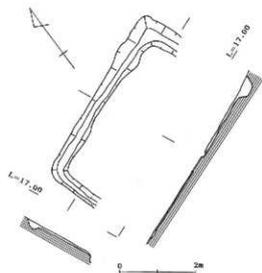
検出された竪穴住居址は、南東側半分以上が遺造物のために削られ失われており壁が僅かに残る程度でした。溝の遺存状態は良く、幅約30cmで壁際に掘られていました。

方形で、南北方向で約5mあります。ピットは検出されませんでした。

土師器の小片が出土しており、また、その形状から古墳時代のものと思われていますが、それ以上の時代の特定はできませんでした。ただ、前年までの調査で、このS I 01の南方100~120mの地点で、円形状の弥生時代の竪穴住居址が見つかっており、それより下る頃と見て良いと思われています。



第12図 第31調査区実測図



第13図 S I 01実測図

I 遺物

東船遺跡では、縄文から近代にかけての長い時代範囲のなかで、様々な遺物が出土しました。中でも、黒曜石片は多量に出土しました。製品となるものは非常に少ないですが、石鏃等が見つかっています。土器類では土師器がほとんどですが、須恵器、陶磁器類、それに土錘も少しですが検出されています。土器類は小片が多く、器種・器型の分かるものは少ないのですが、土師器の中の形の分かるものは古墳時代後期が主流です。検出された遺物そのものが少ないこともありますが、遺構に伴う遺物の出土例が非常に少なく、どちらかといえば混濁状態の出土と言えます。

この項では、比較的形の分かる遺物の実測図を掲示し、報告とします。

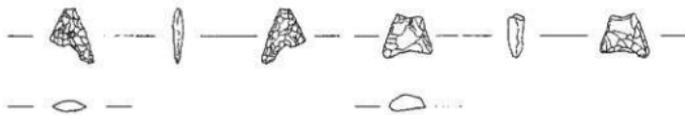
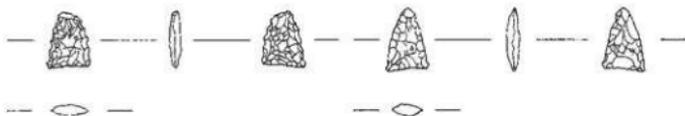
【第26調査区出土】



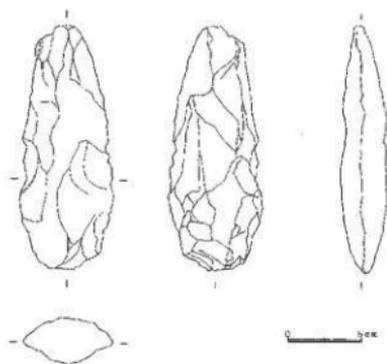
須恵器 (S=1/2)



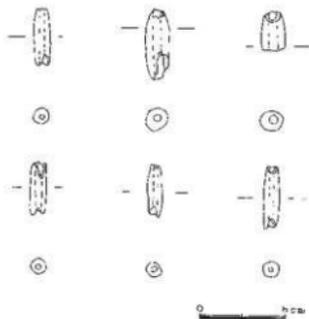
【第27調査区出土】



石鏃実測図 (S=1/2)



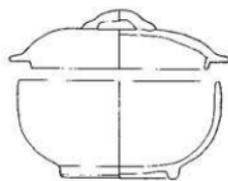
石斧実測図 (S=1/4)



土錘実測図 (S=1/3)

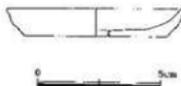


土師質土器実測図 (S=1/2)



陶器実測図 (S=1/2)

【第28調査区】



土師質土器実測図 (S=1/2)

5 おわりに

東船遺跡においては、旧石器時代から近世・近代にかけての幅広い年代での遺構・遺物が検出されています。本年度の調査においては、明確な遺構としての検出は、竪穴住居址（S101）だけといえるかもしれませんが、遺物についてみるとかなりの量が出土しています。なかでも、製品、完形品は少ないものの、黒曜石、土師器の出土量は相当のものがあります。黒曜石についていえば、隠岐島は中国地方では唯一の産出地であり、驚くに足りないかもしれませんが、島内竊地間の交流については、まだまだ研究の余地が残っており、貴重な資料と成りえます。調査を終えたばかりで、全ての出土品に対して詳細に検討を加えていない部分もあり、今後の課題といえます。

また、前二ヶ年の島根県教育委員会の調査成果とつきあわせて検討することにより、より貴重な資料が得られるものと思います。特に、中近世の陶磁器が多量に出土しており、建物跡についても弥生時代の竪穴住居から近世の掘立柱建物跡まで検出されており、これらを総合的に検討すれば今津地区の社会生活の歴史が明らかされるものと思います。このことは、隠岐の中近世の歴史のさらなる解明に役立つものであるといえます。



S D01調査風景



S D01石組の状況 (南から)



S D01完掘後の状況 (南東から)

第26調査区



完掘後の状況（北東から）



完掘後の状況（南から）



遺物出土状況 - SP01



遺物出土状況 - SP02



完掘後の状況（北から）



完掘後の状況（北東から）



S K09・10・11完掘後の状況

第28調査区



盛土断面の状況 (西から)



盛土断面の状況 (北から)



完掘後の状況 (南から)

第29調査区



完掘後の状況（南西から）



ピット群の検出状況（北西から）



SA03（北東から）

第30調査区



調査前の状況（西から）



調査前の状況（西から）



ベルトの設定（南から）

第30調査区



掘下げの状況（西から）



土層断面の状況（西から）



土層断面の状況（西から）



S K12 (北から)



S K12定置後の状況 (北から)



完掘後の状況 (南西から)

第31調査区



S I 01 (北から)

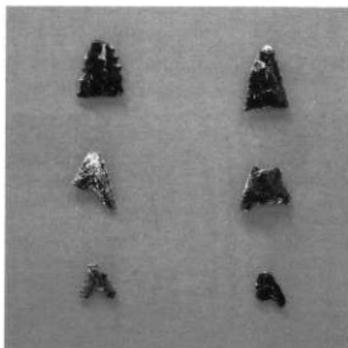


調査区から今津港を見る

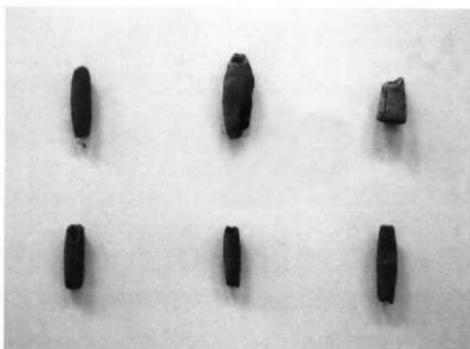
遺物



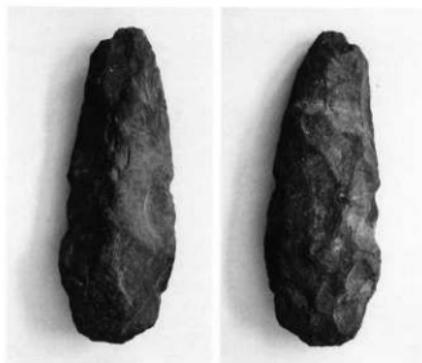
第26区出土 須恵器



第27区出土 石楯



第27区出土 石錘

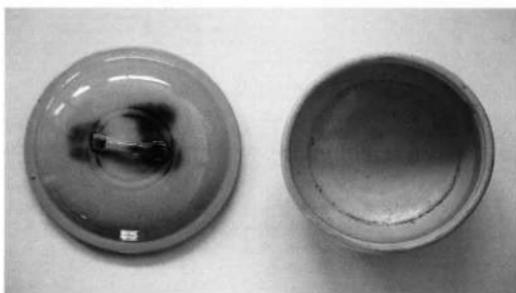


第27区出土 石斧

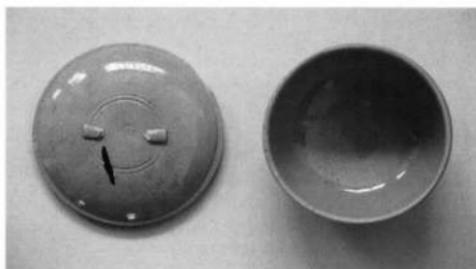
遺物



第27区出土 土師質土器



第27区出土 陶器 (SP02)



第27区出土 陶器 (SP01)



第28区出土 土師質土器



報告書 抄録

| | |
|-------|--|
| 著者名 | 藤田 大輔 |
| 著者名 | 泉崎浩隆 |
| 題名 | 国語学専攻卒業に基く国語文化財調査報告書 |
| 巻次 | |
| 号次 | |
| 著者名 | 藤田 大輔 |
| 編集機関 | 国語学専攻教育委員会 |
| 所在地 | 〒686-0014 鳥取県鳥取市西町大字西町字八尾9-58 取 08612-2-2126 |
| 発行年月日 | 2006年5月 |

| 所属学会 | 参加名 | 日次 | 日次 | 集注 | 調査期間 | 調査時間 | 調査内容 |
|-------|-------------------------------------|----------|-------------------|--------------------|-----------------------|-------------|-------------------------|
| 所収通称名 | 所在地 | 市町村：道庁番号 | | | | | |
| 京大通称 | 鳥取県鳥取市 鳥取市西町大字西町字八尾9-58 国語学専攻 | 28571 | 36度 29分 30秒 | 133度 18分 50秒 | 2001/4/2 2002/3/29 | 約2.000 分 | 国語学専攻調査 結果報告書 国語学 |

| 所収通称名 | 種別 | 年代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 登記年月 |
|-------|-----|----------|------------------|---------------------------|------|
| 京大通称 | 築造跡 | 縄文 時代 | 環状住居址 粘土片(土器) | 土器、石鏃、土部 器 須石器、陶器土器 | |

隠岐空港整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書

東船遺跡 Ⅱ

編集 隠岐島後教育委員会

隠岐県隠岐郡西郷八咫の 58

発行 平成14年3月

印刷 坂部印刷株式会社

松江市中原町192